

Title	経済学名著解題 一千八百四十八年版ブルノー・ヒルデブランド著 現在及び将来の国民経済学 第一巻
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.3 (1943. 3) ,p.239(83)- 251(95)
JaLC DOI	10.14991/001.19430301-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430301-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あると云ふ事實を強調したのである。(註)

(註) ミュルダールの方法については、山田雄三教授譯「ミュルダール經濟學說と政治的要素」を参照されたい。尚、ウィグセル、リンドベール、シュネダーの理論をケインズの「一般理論」との關聯の上で發展せしめたものとしてオーリンの注目すべき論文 (Some notes on the Stockholm Theory of Savings and Investments I, II, The Economic Journal, March, June, 1937) がある。マツシタハルト學派のケインズ並にハイエク等との比較論述は他の機會に取扱を積りである。

經濟學名著解題

一千八百四十八年版ブルノー・ヒルデブランド著

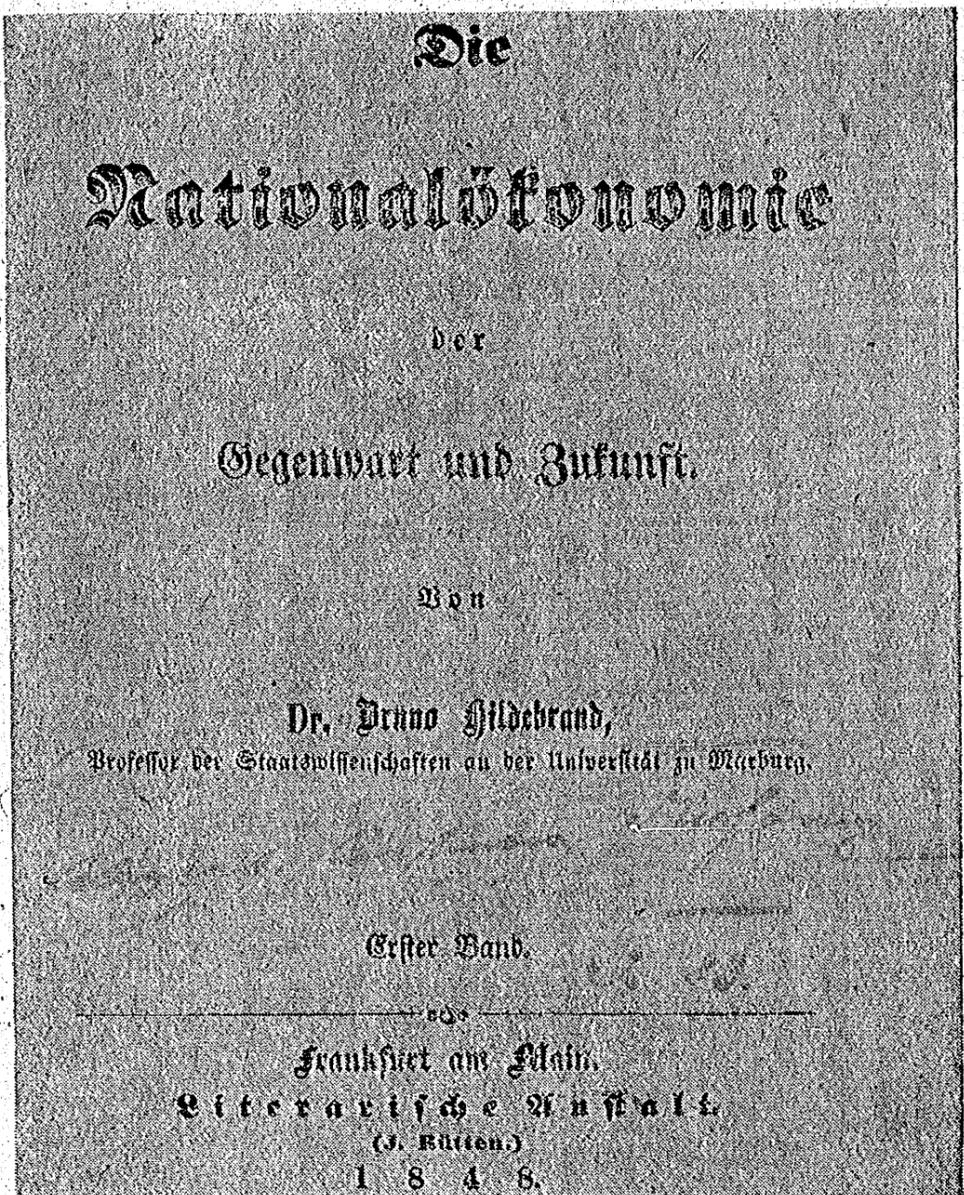
『現在及び將來の國民經濟學』第一卷

高橋誠一郎

經濟學史家によつて、ロッシナー及びクニースと並んで獨逸舊歴史學派を代表するものと看做されてゐる經濟學者にブルノー・ヒルデブランド Dr. Bruno Hildebrand) がある。

ヒルデブランドは、一千八百十二年三月六日、普魯西ザークセン州、ザーレ河畔の都市ナウムブルクに生れた。父は裁判所書記であつた。初め両親の意志に従つて、ライプツィヒ大學に於いて神學を學んだが、其の後幾許もなく、プレスラウ大學に於いて哲學及び歴史を研究し、一千八百三十六年、同大學に於ける歴史私講師の資格を得、三十九年同大學助教授となり、四十一年マールブルグ大學に招かれて國家科學の正教授に任ぜられた。彼は一千八百四十八年、フランクフルトのパウル教會 (Paulskirche) に開かれた獨逸諸國の代表者會議にマールブルグを代表し、獨逸をして更らに自由なる政治的諸施設に向つて進ましめんとするの運動に活躍し、又四十九年より五十年に互りヘッセン選舉侯國の議會にボッケンハイム市を代表して議席を占めた。彼は一千八百五十年九月、前記ヘッ

セン議會に於いて、政府の要求せる年次豫算案に於ける違憲的なる追加的財政援助を拒否するの動議を提出し、其の通過によつて議會解散と爲つて後、マールブルグ大學に於ける其の地位を喪ひ、瑞西に赴き、初めはチューリッヒ大學に於いて、後にはベルン大學に於いて、國家學の教授に任ぜられた。彼れはベルンに州立統計局を創設し、又、數年間之れを管理した。一千八百六十一年、イェナ大學の國家學講座に迎へられ、死に至る迄其の職に在つた。其の翌一千八百六十二年『國民經濟學及び統計年報』(Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik)を創刊し、一千八百七十三年に至る迄、單獨之れを編輯し、其の後、彼れの學生であつたヘレ大學國家學正教授ヨハネス・コンラート(Johannes Conrad)の援助を受けて、死に至る迄之れを主宰した。彼れの死後コンラートは其の單獨の編輯者となつた。一千八百六十四年七月一日、彼れは其の努力によつて創立せられたチューリッゲン聯邦統計局の總裁(Direktorat)に任ぜられ、多數の貴重なる統計的研究を出版した。彼れは強大なる精力と組織力とを有し、其の興味と活動とは學術的研究及び教授の外に延び、實業及び社會方面にも及んだ。彼れはチューリッヒの東北鐵道及びベルンの東西鐵道の如き小鐵道とイェナを起點とするザール谿谷に於ける短小なる鐵道の建設に盡瘁し、又其の居住せる諸都市、マールブルク及びイェナには寡婦年金、ベルンには貯蓄貸付銀行等を創設するに努力した。一千八百四十六年には長く英國に滞在して労働狀態及び製造工業を研究した。其の研究も亦多方面に亘り、統計の領域に於ては Statistische Mitteilungen über die volkswirtschaftlichen Zustände Kurhessens, 1853. Beiträge zur Statistik des Kantons Bern, Bd. I, 1. Hälfte, 1860. Statistik Thüringens, Mitteilungen des statistischen Bureaus Vereinigter Thüringischer Staaten, 2Bde., 1867-1878. 古代經濟狀態及び思想に關しては Xenophonis et Aristotelis de oeconomia publica doctrinae illustrata, 1845. Untersuchungen über die Bevölkerung des alten



Italiens. (Neue Schweizerische Museum, Jahrg. 1861.) De antiquissimae agri romani distributionis fide, 1862. Die amtliche Bevölkerungsstatistik im alten Rom. (Jahrb. f. Nat. u. Stat., Bd. VI, 1866, S. 81 ff.) Die soziale Frage der Verteilung des Grundeigentums im klassischen Altertum. (a. a. O., Bd. XII, 1869, S. 1 ff. u. 139 ff.) 財政方面に於て Die Kurhessische Finanzverwaltung, 1860. Die Vermögenssteuer und die Steuerverfassung in Althessen während des 16. und 17. Jahrhunderts und die aus der Vermögenssteuer Hessens hervorgegangene Grundsteuer. (a. a. O., Bd. XXV, 1875, S. 297 ff.) 經濟發達の段階を取り扱つたものとして Natural, Geld- und Kreditwirtschaft, (a. a. O., Bd. II, 1864, S. 1-24.) Die Entwicklungsstufen der Geldwirtschaft, a. a. O., Bd. XXVI, 1876, S. 15 ff.) 等がある。然しながら、彼れの主著と看做されてゐるものは、一千八百四十八年にフランクフルト・アム・マインで出版せられた『現在及び將來の國民經濟學』第一卷 (Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft, Erster Band.) である。其の出版の當時に於ては、第二卷が企圖せられたのであるが、而もそは遂に完成せられることなくして終つた。彼れが一千八百四十六年に於ける前記英國滯在中に蒐集した資料の多くは此の著作中に利用せられた。コンラートの手に成つたヒルデブラントの著作目録は前記『年報』第三十卷 (一千八百七十八年) に掲げられてゐる。(S. I-xvi.)

II

此の書中に於て、經濟學方法問題に關する彼れの意見は最も明瞭に表明せられてゐる。彼れは歴史の見地に立つて、國民經濟學の諸體系、即ちアダム・スミス及び其の學派、アダム・ミュラー及び國民經濟學上の浪漫主義、フリードリッヒ・リスト及び政治經濟學上の國民主義、社會的經濟學說、ブルードンの國民經濟學說等を批判し、而

して、倫理的及び政治的に現代に於ける經濟的發達の諸法則を論述せんとする。而も、彼れが彼れ自身の體系を叙述するの計畫であつた此の著の第二卷は前述の如く完成せられずして終つた。彼れは主として批判的なる第一卷のみを世に送つたに過ぎなかつた。本書は其の親友マールブルグ大學化學教授ローベルト・ブレン博士 (Robert Wilhelm Eberhard von Bunsen) 及び同大學歴史教授ハインリッヒ・フォン・シムル博士 (Heinrich von Sybel) に捧げられてゐる。

歴史は唯り經濟學に生命を與へて、之れに完全なる發達を得せしむるのみならず、全然之れを改造するに資することをすら得るものである。とヒルデブラントは思惟した。彼れが究竟の目的は「國民經濟學の領域に根本的なる歴史的方向及び方法の路を開いて、斯學を諸國民の經濟的發展法則の學 (Lehre von den ökonomischen Entwicklungsungesetzen der Völker) と化せしむる」に在るのである。(Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft, 1848, Vorrede, S. v.)。斯くの如きは彼れの先輩ロッシヤの聲を反響するに過ぎざるが如くではあるが、而も彼れは這般の概念を把握することがロッシヤに比して遙かに堅く、且つ彼れが之れを表明せる言辭は前者よりも遙かに吸引力大なるものがあつた。彼れの經濟學改革の企圖に當つて其の模範となつたものは、前者に於けるが如く歴史的法理學ではなくして、第十九世紀に於いて改造せられた言語學 (Sprachwissenschaft) であつた。即ち彼れ曰く「勞作は、國民生活の經濟的方面の認識に對して、そが此の世紀に於いて言語學に於いて經驗したと同様の改革を企圖した」と。(a. a. O.)。

ヒルデブラントの意見に據れば、其の顯著なる功績及び眞に世界史的なる態度にも拘らず、アダム・スミス及び其の全學派は其の先進者たる重商主義者及び重農主義者と等しく、其の法則が總べての時代と國民とに對して絶對

に妥當性を有す可き國民經濟理論を建設せんとするの誤謬を犯したのである。恰もルッソー及びカントが自然によつて與へられた人類の相違を顧ることなく、又彼れ等の相異なる發展段階若しくは、諸國民の素質を顧ることなく絶對國家を構成せんことを求むる國法的及び政治的學派を起したと等しく、アダム・スミス及び其の學徒は、ロッセ (M. P. Rossi, Cours d'économie politique, 2 Tom. Paris 1838 u. Bruxelles 1840.) 及びクインシー (Thomas de Quincey, The Logic of Political Economy, 1844.) に至る迄、各箇國民の特殊の諸事實及び發展時機に屬する諸事實から普遍的に妥當なる定則を引き、斯くて又、世界及び人類經濟學 (Welt- und Menschheitsökonomie) の一種を構成せんことを求めた。斯くの如きは全然當時の合理主義的啓蒙の時代に適合せるものであつた。ラウ (Karl Heinrich Rau) は一千八百四十三年、其の Archiv der politischen Oeconomie und Polizeiwissenschaft. 誌上の論稿 Ueber List, Das Nationale System der politischen Oeconomie. 中に於て、スミスが國民的分界を認めたことを理由として斯くの如き見解を拒否してゐるが (a. a. O., Bk. V., S. 264.)、而もヒルデブランドは斯くの如き反對論に賛することを得ないで、「スミス學派の世界主義的性格は、それが國家の存在を注意しなかつた事實に求む可きではなくして、寧ろ、それが國家を單に其の外部的境界線に従つて全人類集團の單純なる區別に過ぎざるものと解し、而して其の法則に對し、普く同一の妥當性を歸せしめて、其の學說を總べての國家と國民とに對して等しく適用せるの事實に存するものである」と做してゐる。(Hildebrand, Die Nationalökonomie, a. a. O., S. 27 u. 27-28 n.)。

ヒルデブランドを以つて觀れば、彼れ等は、總べての國民經濟の法則は、是れ等のものが物財に對する人間の關係に基けるが故に、時間及び空間を超越し、現象の總べての變化に拘らず依然として不動であると做すの見解から出發し、而して、是れに由つて社會的實在たる人間が常に文明の子であり又歴史の所産であること並びに其の欲望、

其の形成、其の人間に對すると等しく物財に對する關係も亦依然として同一であることは斷じてなく、常に歴史的に變化すると等しく地理的にも亦相違しつゝあるものであつて、人間種屬の全文化と共に前進しつゝあることを完全に忘却するものである。(a. a. O., S. 28-29.)。

本書の著者に從へば、スミスの教旨が其の時代の國法學 (Staatsrechtslehre) 及び全啓蒙的文學と等しく共有する其の第二の特性は茲に生ずる。是れ等のものは同一なる人間的及び市民的社會の原子主義的根柢から出發し、而して單獨の個人を以つて共同社會の唯一の目的と看做すのである。政治的合理主義に取つては、國家は單に總べての個人の保障を目的とする法律的施設に過ぎざるの觀あるものであり、經濟的合理主義に取つては、經濟社會は單に各箇經濟の私的欲望のより容易にしてより快適なる満足を目的とする其の聯合若しくは組織に過ぎざるの觀あるものである。前者は社會を法律的契約の上に基かしめ、後者は各個人の交換契約の上に基かしめる、而して個人の私的利益は兩者の場合に於いて共同社會の原因及び羈絆として役立つた。是れに由つて又、是れ等兩者は個人が彼れ等に提供せらるゝ勤務に對して國家に支拂ふ價格として課税を考察し、而して這般の教理の上に、各市民が國家の保護の下に享有する所得の高に從へる課税分配の必要を基かしめた。(a. a. O., S. 29-31.)。

著者は語を續けて言ふ、經濟科學の人間種屬の倫理的課題に對するあらゆる關係の缺乏は同時に又、這箇個人的利益の斯科學の最高原理への高揚に存する。而して是れが爲めにスミスの教理が唯物主義と非難せられたることも亦あながち不當ではない。縱令ひ又、大多數殊に斯教理の獨逸學徒は決して物質的享樂を以つて人間の目的と考ふることなく、却つて國民經濟的支配に關する教理に於いては、私的富をも亦、個人の倫理的完成に對する手段として、より高き倫理的善及び國家的安寧と結合せしめんことを求めたのであるが、而も猶ほ彼れ等は是れに由つて國民經

濟學其の者の上に於ける最小の影響をも這般の科學的分科に對して許容することなく、却つて恰もアダム・スミスと等しく、全能なる私利己心の假定の上に後者の全堂宇を建設したのである。(是れに由つて法學者ツァーリヒ(Karl Salomo Zachariae)其他は又、「一般國民經濟學を貪欲の方法學(Methodenlehre der Habsucht und des Geltes)と呼ぶに躊躇しなかつたのである)斯くて、スミス學派の英國及び獨逸分派の間には、單に、前者が、私利己心は常に自から必然に共同の福祉に導くと做すの原理から出發するに反し、(這般の原理は第十八世紀前半の英國倫理哲學から發芽し、而して、徳は總べての公の福利を破壊すると云ふ其の最も粗野なる話法に於いて、マンデヴィル(Bernard de Mandeville)によつて、其の有名なる『蜜蜂寓話』に附せられた註釋及び論文に於いて支持せられた)、後者は此の原理を普遍的に承認することなく、斯くて又、共同の福祉を目的とする國民經濟的支配によつて人間の自利心の上に基礎を有する國民經濟を完成せんとするの相違が生じたに過ぎぬ。(a. a. O., S. 31-33.)

而して、著者はスミス學派に對する其の評語を結んで言ふ、國民經濟的科學は、全スミス學徒には、あらゆる自然力と等しく常に同一の方向に發動し而して同一事情の下に於いては常に同一作用を現す純然たる利己的の力として個人を假定する交易の自然科學と思惟せられるのである。是に於いて乎、英國に於けると等しく獨逸に於いても亦、人は彼れ等の法則及び準則を自然的經濟法則若しくは經濟生活の自然法則と名付け、而して、他の自然法則に對すると等しく、是れ等のものに對して永久の持続性を負はしめたのである。(a. a. O., S. 33-34.)

斯くの如くアダム・スミス及び其の學派を論評し終れるヒルデブラントは、次いで之れに對する批判者としてのアダム・ミューラー等の國民經濟的浪漫主義者及びフリードリッヒ・ヒリスト及び其の政治的經濟學の國民的體系並びに其の先行者アレグザンダー・ハミルトンに就いて検討し、更らに社會經濟的理論、特に又フリードリッヒ・エンゲルス

を論じ、最後にブルードンの國民經濟理論を究明してゐる。恐らく彼れの最良且つ最峻酷なる批評はエンゲルス、ブルードン及びヒリストの教義の理論的部分、ヒルデブラントも彼れ自身總和なる保護主義者であつたが(其れであらうと言はれてゐる。スミスは對して獨逸に於いて一般に行はるゝに至つた批評は本書中に於けるヒルデブラントの其れから引き出さるゝ所の多いものである。尙ほ彼れが當時の社會主義者を評して、彼れ等は彼れ等の夢想せる世界を、言はず、魔撃を以つて成立せしめんとし、而して、人間種屬が其の歴史上走り過ぎたあらゆる新形成物は、唯り舊い與へられた要素から生長し得るものであり、又現在の土壤の濕氣から其の榮養を吸収しなければならぬことを注視することがないと稱したことも亦、空想的社會主義者に對する定評となつた所のものである。(a. a. O., S. 264.)

ヒルデブラントは又、本書中に於いて、社會的經濟理論の功績を論ずるに當り、現在の國民經濟が貨幣經濟と稱せられ得可きが如く、又、過去の其れが自然經濟と稱せられ得可きが如く、將來の其れは信用經濟として特性付けられ得可きものであると云ふ意見を表明した。(a. a. O., S. 276 ff.)。而して、此の書に於いて、屬發的に以上三範疇の下に國民經濟の歴史的發展を叙した彼れは、其の後、彼れの『年報』に掲げられた論稿『自然・貨幣及び信用經濟』(Natural-, Geld- und Kreditwirtschaft)に於いて、此の三段階説を精妙に完成するに至つたのである。(Jahrbücher, a. a. O., Bd. II, 1864, S. 1-24.)。尙ほ、彼れはブルードンの價值理論を批判するに當つて、效用は又價格の究竟的決定者たることを示さんとするの態度を示し、經濟的意義に於ける效用は數量の函數であり、而してこれは主觀的價值と價格との間の連絡を與ふるものであることを明かならしめんことを企圖した。(Die National-ökonomie, S. 316 ff.)。洵に、彼れ及びクニースは舊效用價值學説を新效用價值學説へ繋ぐ連鎖を形成せる底の意

見を表明せるものとも稱せらるゝを得可きである。

三

ヒルデブランドは實に、總べての時に對し又總べての國々に對して妥當す可き自然的經濟法則を發見せりと做し若しくは少くとも是れ等のものを探求しつゝありと做すスミス學派の主張を直截に拒否したのである。彼れは經濟生活の生理學を發見するを以つて可能なりと做すの意見に反對した。ロッシヤは「國民經濟の解剖學及び生理學」(Anatomie und Physiologie der Volkswirtschaft)とも稱す可きものを求めんことを揚言したのであるが、(Grundlagen der Nationalökonomie, 21. Aufl., 1894, S. 59)「彼れは其の『年報』創刊號に於いて、本書中に於けるよりも更らに一步を進めて、特に國民經濟的法則の問題に於いて、古典派經濟學者の教旨を拒否し、併せて、ロッシヤ」が其の存在を承認せんことを企圖したのが爲めに、彼れをすら非難したのである。彼れは先づ同號序言(Vorwort)に於いて曰く、「諸國民の經濟は、其の言語、文學、法律及び藝術と等しく、其の文明の一部門である。そは、洵に、是れ等の他の文化部門と等しく、自然法によつて設けられた一定の限界内に於いて動くものである。然しながら、是れ等の限界内に在つて、そは人間精神の自由と勞作の産物である。従つて之れを取り扱ふ科學は、決して時間及び空間の一切の關係に對して同一の法則を述べ、又同一の尺度によつて一切のものを測定しつゝある自然科學と同様に抽象科學たるものではない。却つて、そは單一國民の場合並びに全人類の場合に於いて等しく段階より段階への歴史的發展過程を研究し、斯くて又、現世代の勞作に依つて社會的發展の連鎖に加へらる可き連鎖を發見するを以つて其の課題とする。國民經濟的文化史並びに一般政治的及び法律的發展の歴史及び統計學は、總べて國民經濟科學の有用なる増設を行ひ得可き唯一の確乎たる基礎である。然しながら、歴史は無關心に對する口實であり、又、科學

者をして實際的時事問題から轉向せしむるものであつてはならぬ。現在の理解は過去の理解と不可分の相互作用に於いて存する。而して、自己の時代の生活條件と生活問題とを熟知しない者は又、正しき歴史の理解を缺くものである」(Jahrbücher, Bd. I, 1863, S. 3)。洵に、彼れは社會發達の領域内に自然法則を設定せんとする古典學派の企圖を排斥し、而して歴史的觀察と統計的測定に基礎を有し其の目的は經濟的發達の現實的過程を探索し之れを其の時代の倫理的及び文化的標準に照して評價し而して愈々高き發達の水準に社會を引き上げるの手段及び方法を指示するに在る文化科學として經濟學を考察したのである。吾人が當さに研究す可きものは、人類の經濟的經驗に於ける變化である。經濟學は各箇國民及び全體としての人類の發達を周到に検討しなければならぬ。そは經濟文化史を産み出さなければならぬ。彼れは同誌同號に掲げられた其の「現時に於ける國民經濟科學の課題」(Die gegenwärtige Aufgabe der Wissenschaft der Nationalökonomie)中に於て下の如くに述べてゐる。「現在の植物及び動物は、猶ほ幾千年以前と同一の自然法則に従つて生長し、化學的要素は猶ほ古代に於けると同一の親和力を相互に有し、而して、今日の世界は、プラトレン及びアリストテレス時代の人々とは別様の思考法則を何等知ることがない。然しながら、人間の經濟行爲及び文化、其の法則に關する彼れの知識、彼れの經濟的目的に對する之れが使用及び支配、彼れの經濟的及び社會的の制度は、總べての方面よりして無限に生長し而してより、完全となる」(Jahrbücher, Bd. I, 1863, S. 144)。「人間社會の各箇成員の形成するあらゆる新認識及び經驗は新觀念及び概念を生じ、而して、一の世代から他の世代へと遺傳し又増殖する人間の精神的總資本を豊富ならしめる。這般の増殖と共に、人類の洞察、認識及び考究力は夫となる、而して人間の實力は新たななる動力、新たななる標點及び這般の標點に到達す可き新たななる手段を獲得する」(B. a. O., S. 144-145)。「知覚なき世界が永久に同一なる法則に従つて

回轉的に運動する間に、洵にそれが現象の變化を知るも、而も何等の種屬的完成、何等の文化をも知らざる間に、精神的なる人類は、進歩的であり、常に新しく、人間精神其の者の勞作及び自由から生長する種屬、文化の發達及び完成を享樂する。這箇自然の生命と人文の其れとの間に存する對立は科學に於いても亦、確然たるものがある。自然科學は知覺なき現實の裡に支配的法則を、自然生活の變轉裡に永久的なるものを探り、人文科學は、之れに反して、人類の自覺的生活の中に進歩を、人間の變化及び經驗中に人間種屬の完成を求め、國民經濟の科學は、是に於いて乎、動物の有機體の生理學若しくは自然科學の他の部門の如く、自然法則に關與することなく、そは經濟的現象の多様性の中に、不變的であり普遍的に同様なる法則を探求することなくして、國民經濟的經驗の變化の中に進歩を、人類の經濟生活の中に人間種屬の完成を、表示す可きである。其の課題は、各箇國民並びに又全人類の國民經濟的發展過程を段階より段階へと探求し、斯くして又、現在の經濟文化の基礎及び建築並びに其の解決が現存世代の勞作に保留せられてゐる課題を認識するに存する。(a. a. O., S. 145-146)。

此の『課題』中に於いては、彼れが曩きに其の主著中に於いて經濟學の前に提出した經濟發達の大法則の發見に關しては殆んど全く言及せられる所がない。洵に、前述の如く、彼れは遂に彼れが學界に向つて公約せる其の構成的の著作を公にすることなくして了つた。而して、彼れが特殊的なる歴史的統計的研究に對する批評を残した場合に、彼れは古典的結論の大多數を是認せるかの如き觀がある。尙ほ、彼れに對するカール・クニースの評言に就いては、吾人は會つて後者の『歴史的方法の見地よりする經濟學』に對する解題中に於いて一言する所があつた。(『三田學會雜誌』第三十六卷第六號七八一七九頁参照)。而して彼れ並びにロッシヤー及びクニースによつて代表せらるゝ所謂舊歴史學派なるものは嚴密なる意義に於いて歴史的とは看做され得ざるものであると云ふ説すら存する。然し

ながら、吾人は、彼れが經濟學上に於ける自然法則の探求を拒否し、斯學をして人類の進歩と完成とを求め、一個の文化科學たらしめ、社會改良に對して路を開ける點に於いて若き歴史學派並びに講壇社會主義者等の業績に對して影響する所のあつたことを認めなければならぬ。

彼れは獨逸經濟學者中に在つて有數の思索家であり、又、此の國の著作家を特色附けること餘りに多き多言臆舌と曖昧朦朧とに累せらるゝことの全くないものと言はれてゐる。

彼れの主著は「千九百二十二年、ドレスデン工業大學 (Technische Hochschule) 教授ハンス・ゲーリッヒ (Hans Gehrig) によつて其の『年報』所載の重要論文五篇と共にツェンチャー博士 (Heinrich Waentig) 監修 Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister, S. 第111卷と」『Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft und andere gesammelte Schriften von Bruno Hildebrand.』の題下に新刊せられた。ゲーリッヒは又、千九百二十二年、同『年報』に Bruno Hildebrand Gedenkworte. を掲げしむる。(a. a. O., III. Folge. Bd. XIII, S. 1-16)。

茲には例によつて、本書初版本の表題頁を寫眞版として掲げることとした。